

『余地』

～相談業務を楽しむ方法 15～

<読書会がもたらしたもの>

杉江 太郎

～「読書会の案内」の案内～

年度が変わる頃、対人援助学マガジンの編集担当の方より連絡があり、新たな取り組みとして読書会を開催すること、その際に、私の連載を取り扱いたいという連絡が来た。私は、最初に見たときに、一部しか読んでいないこともあって、意味がわからなかった。さらにその方が大学で生徒らに授業をしていることを知っていたので、その中で利用する意味なのかと勝手に判断をしていた。もしそうだとしたら、ウェブ上に置かれたものであり、いつでも、誰でも読める状態であることが対人援助学マガジンであるので、わざわざ了解を得る必要もないのに・・・なんて考える始末であった。

ところが、よくよく読んでみると、なんとキチンと広報をした上で、読書会を開催し、その中で私の連載を取り上げたいということであり、なぜ私の連載なのか、誰が参加するのか、そもそも読者がいたのかなど疑問に思いつつ、特に断る理由もないので快諾した。

そして、連絡の中には、連載を取り上げることの確認以外にも、広報する際の

私の紹介文の確認、さらに参加の依頼も含まれていた。

送られてきたプロフィール（執筆者の紹介）には以下のように書かれていた。

「児童相談所に勤務しながら、立命館大学大学院を修了し、現在も児童相談所で勤務を続けている。子どもの福祉を守るという使命、メディアからの圧力、様々な責任の擦り付けに耐えつつ、『余地』をテーマに連載を続けている」

本当に私はこんな人間なのだろうか。その紹介文を読んで、とても熱い、豪快な人間のように思えた。しかし、どこかが間違っているのかと言えば、そうではなさそうである。訂正すべきところもとくに思いつかなかった。そのままSNSに流れたときの心配も頭に通りつつ、かといって訂正するまでもないと思いそのまま快諾をした。

そして、読書会への参加である。初回に取り上げられる経験は1度きりである。当然、参加したいと思った。しかし仕事柄、先の予定がわからない。そしてそれ

以上に、誰か参加するのか、もし児童相談所のことを良くないと思われている方が参加したらどうしようなどと不安な気持ちもあった。そんなことを考えながら、少し時間を置いてから、参加させていたきたいと連絡をすることにした。

～マガジン連載に込めた思い～

参加を決めてからというもの、常に自分の連載は何を意図しているのだろうかかと自問自答していた。そして、改めて自分の連載を読み返した。

私は、『余地』を表題にして連載を続けていた。『余地』には、余裕、ゆとりという意味があり、さらに私の中では『糊代』というイメージが強い。糊代は全体の一分であり、糊代以外の部分がメインである。糊代だけの紙がもしあるとすれば、それはただの白紙である。糊代がメインであることはなく、糊をつけて貼り付けてしまうと、もはや見えない部分でもある。しかし、糊代がないと、紙と紙を貼りつけることは出来ず、なくてはならない部分でもある。

私の中では、仕事における『余地』も同様である。当然、仕事の中でメインになることはない。あくまでも一部であり、表立って目に見えるものではない。しかしその『余地』があるからこそ、日常の仕事が成り立っているのである。私はその『余地』に目を向けることが好きなのである。そしてその結果、今の仕事を続

けることに繋がっている。

連載では、今や児童相談所の業務の中心になってしまった「虐待対応」はほとんど扱っていない。お金、ラーメン、ゲーム、ハガキ、漫画など一見仕事とは遠いものを媒介として、私の中の援助方法を扱っている。当然、理論として成り立つものではなく、私の体験を元にした、私の主観を扱ったものである。そのため、参考文献などもない。

一方で、『余地』だけが仕事なのかと言われるともちろんそうではない。私は児童福祉司であり、社会から求められている「虐待対応」を日々行っているという自負がある。だからこそ、その中にある『余地』を見つけることが出来ているのである。

『「余地」について書いていますが、当然、求められている仕事もやっていますよ。だから続けられています。何か問題でもありますか?』

というのが私の連載のテーマだと言えよう。

～想起されたことに想起される～

とは言っても、私の前回の連載は、『担当している子どもにハガキを送っている』というだけの話である。皆それを読んでどう思うのか。その不安は、冒頭に団編集長が発した『私が何をするか、私が決める』という言葉で全て吹き飛んだ。私の大切にしていることは、その一言に尽

きると思った。

そして、私がハガキを送っているだけというエピソードに対して、参加者の方は様々な内容に派生していった。

主体性、ハガキが持つ距離感、社会的養護の自立支援、人と人の繋がり、ハガキの1年とメールの1年の違い、孤立を防ぐ、専門性、人事異動……。そのように派生していく参加者の言葉を聞いていると、ハガキを送ることにそんな意味があったような気がしてくるから不思議である。もちろん、繋がりを大切にしていた部分はあるが、正直そこまでの深い意味は考えずに、やりたいからやっているというのが本音である。しかし、私が主体的にしていることに共感をしてもらい、そのことを言語化してフィードバックされる、さらにその意味付けをしてもらえる、そのような体験が今までにどのくらいあったらうか。

例えば、「虐待のケースの対応大変なのに続けられて凄いですね」と言われても、正直何も感じない。そのことを生業としている以上、当たり前のことをしているだけなのでそのことを他者に扱われても何とも思わない。褒められようが、貶されようが知らない人間が勝手に言っているだけだと思い特に気になることはない。しかし、本来の生業以外のところで、主体的にしていることを扱われ、共感される体験は今までになかった。もちろん、共感をされたいが為に継続しているわけ

ではない。何度も言うように、やりたいからやっているだけなのである。

しかし、本来の業務を続けるに当たって、この主体性のある『余地』は私にとっては必須である。その『余地』があるからこそ本来の業務の継続が可能となっている。そのことを読書会に参加して改めて感じた。

～今後の使命～

児童福祉司を2000人増やすという話が国から出され、どの児相もその真っ只中なのではないかと思う。その上、児童福祉司の国家資格化が議論され、児童福祉司の任用後研修などが義務化されるなど、「専門職」「人材育成」というキーワードをもとに制度などが変化しつつある。正直、そういった動向について、私自身は懐疑的な部分を持ち合わせており、信用していない。

児童福祉司の任用後研修については、制度としては確立しつつも、その運営については、各自治体に任されている部分があり、今まで各職場で実施していた研修の名前を読みかえて実施している自治地体もあるのではなかろうか。

国家資格化になるとして、誰がその内容を教えるのだろうか。そもそも専門性が低いと批判を受けて国家資格化の動きが出てきたのである。資格創設するだけで専門性は上がるのであろうか。そのことを教えられる人材がどれだけ存在する

のであろうか。教科書を読むだけであれば、今からでも教科書を配れば良いだけである。

読書会に参加したことで、今後も主体性を持ち『余地』のある活動を継続していくこと、さらにこの『余地』を扱おうとしない社会的な動向（児童福祉司の国家資格化、法的な縛りの強化など）に対して、意図して反発していくことを今後もテーマにして、やりたいことをやっていこうと強く決意した。その結果、この仕事が続けられているのであれば、そのことがどんな研修や資格よりも役立ったという根拠になる。

今回、参加者は遠いところではフランスというグローバルな集まりであった。この取り組みは物理的な距離を厭わず、多くの援助職者との出会いを可能にする。屋外に出られず、社会的距離を必要とする社会情勢があったからこそ、確立された新しい取り組みだと思った。そうした新しい『余地』に出会わせてもらった機会に感謝している。

お声掛けを頂いた編集者の方、参加して下さった皆さま、どうもありがとうございました。